学生、地域連携授業盛ん

いまどきやましろ

大学生が商店街や市役所などと連携してまちづくりに取り組む地域連携型授業が、山城一帯で盛んだ。地域に向き合ってきた学生は何を学び、何が課題になっているのか探った。

（住吉哲志）

若い感性 受け入れ側刺激

提案の質と継続性課題

京田辺市興戸の同志社女子大で14日、地域連携型授業の成果を発表する報告会があった。情報メディア学科の学生29人が昨年4月から5グループに分かれて仮想企業を立ち上げ、観光イベント開催や特産品売り出しなどに取り組んできた。

京田辺市の伝統食品「一休納豆」を広めようとしたグループは、一休納豆を使ったチーズケーキなどを開発し、レシピをインターネットで公開した。代表の2年木谷安加里さん(20)は「多くの人と関わる中で、目的を明確にする大切さや、説明したり発表したりする力が身についた」と振り返った。

一休納豆を作り、学生と協力した加藤政美さん(66)＝同市薪＝は授業に招かれ「これまでマンネリになりがちだったが、若い感覚と刺激で新しい仕事ができた」と受け入れ側のメリットを話した。

こうした授業は京都産業大と井手町▽同志社大と京田辺市、木津川市▽関西大と八幡市などでも行われている。学生が考える以上に、地域側が高いレベルの質を求めることが課題の一つのようだ。

「もう少し計画を詰めてから提案してきてほしい」「どら焼きを商品にするなら千枚は練習しないと売り物にならない」など、地域の現場に出て厳しく指導される学生もいる。

会議や料理の試作など授業以外の拘束時間も多い。同大と連携した京田辺市の担当職員は「学生は土日や夏休みを返上したり帰りが遅くなっていた」。同大2年の安藤理さん(20)は「忙しさのあまり途中で脱落する学生もいた」と明かす。

新田辺駅前のキララ商店街での同女大のイベント参加や、八幡市での立命館大の子ども会議開催など継続的な取り組みもあるが、1年限りで終わるものも多い。「創造性」や「独自性」を重視する点から授業で学生が新しい取り組みを求められるほか、同女大では地域連携型授業は1年間しか履修できない。

玉露をテーマとした同女大のグループは「祝茶」と題して祝いの席で京田辺の玉露を飲む習慣を広めることを発案。大御堂観音寺（同市普賢寺）の紅葉夜間ライトアップに合わせて昨年11月にイベントを開いた。観光担当の市職員が「来年もぜひやりたい」とほめたが、来年度は授業では取り組まない予定だ。

学生と一緒に活性化に取り組み4年になるキララ商店街事業協同組合の田原剛理事長(45)は「だんだんと学生の力の大きさを実感できるようになってきた。学生の熱意をしっかり生かすためにも継続していく仕組みづくりは大事」と話す。

授業の仕上げとして、開発したどら焼きの試食会を行った同志社女子大の学生（京田辺市河原・キララ商店街）

町と協力したイベントの準備のため河川敷の草刈りに励む京都産業大の学生たち（井手町井手）

2015年1月19日 朝刊 夕刊
京都新聞

山城地域